〔グループ研究〕

ユニバーサル教育を中核とする学校づくり

東近江市立玉緒小学校代表
校　長　　上　野　芳　樹

要　旨

・本校の大きな課題は、文科省の基準を遙かに超える「特別な支援を必要とする児童」への対応である。この課題克服のために、ユニバーサル教育を教育活動の中核において組織的に取り組もうと考えた。どの子も学びやすい環境づくり、どの子も学びやすい授業づくり、全体指導の中での個別支援の方策等について、専門家の助言を受けながら実践を進めた。

教室を開き、実践を共有しながら取り組む中で、玉小のユニバーサル教育スタンダードと言える指導・支援の手法がいくつか確立されてきた。そして、組織的な実践を重ねる中で児童の変容も着実に見られるようになってきた。

Ⅰ　研究主題設定の理由

本校の抱える大きな課題の一つに、「特別な支援を必要とする児童への対応」ということがある。本校では、特別な支援を必要とする児童の数が文科省の示す基準を遙かに超える状況が数年来続いている。集団学習・活動に不適応を示す児童の言動が引き金になって学級や学年全体が混乱してしまうという事態もしばしば起きている。

こうした状況に対応するため、数年前から特別支援教育の研修を進め、特別な支援を必要とする児童の指導・支援のありかたを模索してきた。

今年度も、個別の指導計画を作成している児童数は５９名で、全体の２０%を超える。単なる支援員等による個別的な支援だけではとても対応しきれない状況にある。

そこで「学びや活動に困り感を持つ子どもの視点から指導を改善することによって、みんなが学びやすく、スムーズに活動できるようになる。」というユニバーサル教育の理念に基づいた取組を組織的に展開することで本校の課題を克服できるのではないかと考え、本主題を設定した。

Ⅱ　研究の仮説

学びに困り感をもつ子には無いと困る支援は、どの子にもあると便利な支援であ

る。また、集団全体が落ち着くと、個々の課題も小さくなる。
「みんなにやさしい特別支援教育」を推進することによって、どの子も居場所があり、いきいきと学び活動できる学校が創られていくであろう。

Ⅲ　研究内容と方法

本校では、研究主題に迫るため、取組の視点として、次の３点を考えた。

①環境調整……どの子も学びやすい環境をどのように整えていくか
②授業改善……どの子も学びやすい授業をどう創っていくか
③個別支援……全体指導の中で、個別支援の必要な児童への対応はどのようにすればよいか

その具体的方策を得るため、一昨年は「発達障害児童生徒の指導力向上事業」を受け、特別支援教育の専門家である桂田総司氏の指導を仰いだ。昨年度も同氏を夏季研修会に招聘し指導を受けた。

さらに、今年度は「ユニバーサル教育のための専門家派遣事業」を活用し、本校児童の実態に基づき、指導支援教育の基本的な考え方、指導・支援の手だてについて、桂田氏と小西喜朗氏から指導助言を受けながら組織的実践を積み上げてきた。

Ⅳ研究経過

平成 21 年度	「発達障害児童生徒の指導力向上事業」を受け、取り組む。 講師　桂田総司氏
平成 22 年度 2010.8.3	夏季研修　　講師　桂田総司氏 ＝集団学習に不適応を示す子どもたちを一斉学習の中でどう支援していくか＝ ○４年「夜に鳴くセミ」の授業を素材として
平成 23 年度	「ユニバーサル教育のための専門家派遣事業」を受け、取り組む 【第１回（6.15）】 「ユニバーサル教育の考え方とその実践について」 講師　桂田総司氏 ①全学級授業公開 ②講師指導講話 ・公開授業から見える本校の取組についての評価と助言 ・ユニバーサル教育を組織的に推進するための手立て

	【第 2 回】(8.5) 「特別支援教育と行動分析とユニバーサル教育」 講師　小西喜朗氏 ・演習「ストラテジーシートの書き方」 ・質問タイム「学級の気になる子どもについて」
	【第 3 回】(11.14) 「前半期の実践の評価、および後半期の課題について」 講師　桂田総司氏 ①全学級授業公開 ②前半期の実践のまとめ発表とコメント ③指導・助言

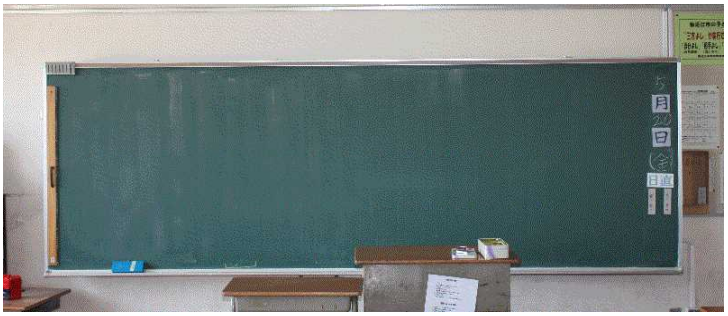
Ⅴ　具体的な実践例

1．どの子も学びやすい環境づくり
～どの子も学びやすい環境をどのように整えていくか～

年度始めにあたり、まず、情報処理や感情コントロールが苦手な子どもたちにも学びやすく生活しやすい環境を整えることに全校で取り組んだ。

その概要を以下に示す。

(1)　教室等の構造化



級訓などは背面に掲示し、教室前面はシンプルにして不必要な刺激を無くす。
子どもたちの視線が黒板に集中しやすくなる。

提出物や保管場所を明示し、入れやすい箱を置く。
整理整頓の苦手な子も出し入れしやすく、教師もチェックもしやすい。

並ぶ位置をテープやカードで明示する。自分の位置がすぐ分かり、集合・整列がスムーズになる。結果的に無駄なストレスが無くなる。

「机の高さをそろえる」

５年担任が研究会の事後研でこんな話をした。

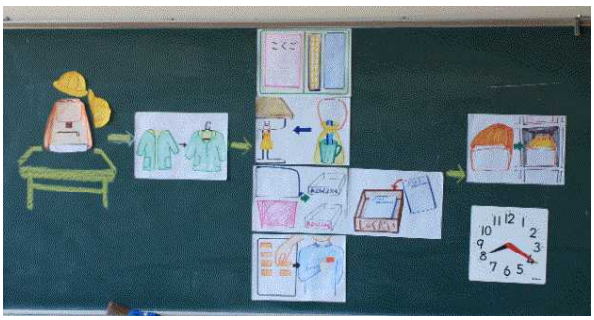
「班活動をさせるのに、なかなかすっと動いてくれない。よく見ると、机の高さがまちまちで揃っていない。それで、机の高さが揃うよう調整してみたら、活動しやすくなったせいか、それ以来スムーズに班の形に並び替えて活動を進められるようになった。」と。

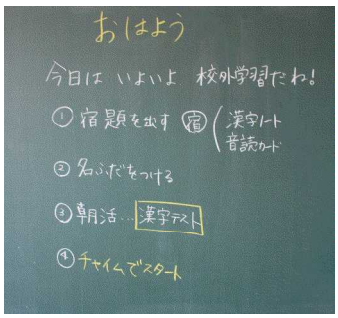
これも一つの環境調整である。こういう小さなところに意識を向けられることがユニバーサル教育的指導改善につながるのだと職員で確認しあった。

(2)　見通しを示す

集団で何かの活動をさせるとき、見通しを持たせることは重要である。特に、発達障害児の多くは、次がどうなるのか見通しが持てないと参加すること自体を拒否したり、活動の途中でパニックに陥ったりする。

見通しを具体的に示す、ということもいろんな場面で意識的に取り組んだ。





一日のスケジュールや準備物を視覚的に指示する。
不注意の子、見通しが持てないと不安になる子の支援になると同時に、活動がスムーズに進行する。

活動のゴールを明示するタイマー・時計盤等の設置
「終わりの時間が見える」ことで弛緩した空白の時間が無くなり、集中が増す。

これは、中学年の運動会練習のスケジュール表である。
練習が、今どこまでできていて、今後どんなふうに進んでいくのかが見えるようにしてある。

集団行動が苦手な子も、この表から練習を選択して参加する、ということもできた。

(3) その他　～行事等の実施時期変更による環境調整～

本校では、今年度から運動会の実施を 1 学期開催とすることを協議の上決定した。近年、夏休み明けの残暑が生理的な限界を超えるようになってきていることがその理由である。1 学期実施にも課題はあるが、子どもの健康面・心理面での負担を考えたとき、1 学期開催の方がベターであるとの結論に達した。

実施してみた結果、その成果は予想を上回るものがあった。

第一に保健室へ来室する児童の数が例年に比べて激減したと養護教諭から報告を受けている。穏やかな気候条件が子どものストレスを確実に軽減させ、発達上の課題を有する児童にはとりわけ有効に働いたと言える。

６月の運動会

入学して間のない 1 年生の負担が心配されたが、問題なく練習に参加できていた。幼・保教育の成果を再確認した次第である。

運動会の実施時期変更に伴い、他の教育活動の実施時期も変更した。

水泳指導は、まだ肌寒い梅雨の時期を避けて 7 月初旬から始め、９月も第 2 週までを後期水泳指導期間とした。この変更も大いに成果を挙げた。とりわけ後期水泳指導は、残暑の中でむしろ快適に行うことができ、子どもたちの泳力も飛躍的に伸びた。高学年ではほぼ皆泳を達成し、半数近くは数百m泳げるまでになった。

９月の水泳指導

1 学期に実施していた音楽会も、気候の落ち着く 10 月に行うことで、スムーズな練習が行えた。

このように､生理的に適切な時期を考慮して年間の教育活動を設定することは、ユニバーサル教育の視点からも重要だということを今年度の実践から再確認した。

2. 授業改善

～どの子も学びやすい授業をどう創っていくか～

６月の第 1 回ユニバーサル教育のための専門家派遣事業研修会で、全学級が授業を公開し、ユニバーサル教育の視点から見た授業改善の方策について、講師の桂田先生から次のような助言をいただいた。

・見通しを持たせること

・45分は３つの間仕切り弁当と考えるとよい。一つめがウォーミングアップ。二つめがメイン。最後がまとめと次時の方向付け。
・1時間の中に習熟度別指導を取り入れるなど、思い切った学習スタイルを工夫したい
・シーンとする瞬間があって次の活動に転換していく。その手立ての一つに「教師の指示」も入ってくる。いかに指示の言葉を精選するか、削れるか。
・意味のない「間」を作らない。つまらないところに意識を向けているひまがないようテンポよく進むこと。
・ちょっと背伸びする時の支えになる、ちょっと背伸びしてやってみたくなる励まし、支援、それがユニバーサルな教育の眼目である。

こうした助言をもとに、これまでの取り組みからいくつかの共通実践の柱をつくり、授業改善に取り組んでいった。整理すると次のようなことであった。

(1)　1時間の授業の見通しを持たせる

この時間は何をするのか、どういう手順で学習していくのかを授業の始めにきちんと示すことで学習の見通しが持て、集中の持続も得やすくなる。

今本校では、「授業の始めに一時間の学習の流れを板書する」という指導パターンが全学級で定着するようになった。

９月、教育課程訪問で参観された県指導主事も、「指導の原則的な形が共通になっているということは、学年が変わり担任が替わっても安心して学習に臨めるので、支援の必要な子どもたちにとってもたいへん良い。」と評価していただいた。

(2)　授業始めの5分間集中トレーニング

授業の最初５分間を基礎的な学習の反復練習に充てることで、休み時間から授業への切り替えを図り、学びの姿勢を学級全体につくらせようとする取り組みも各学級で試みられるようになった。

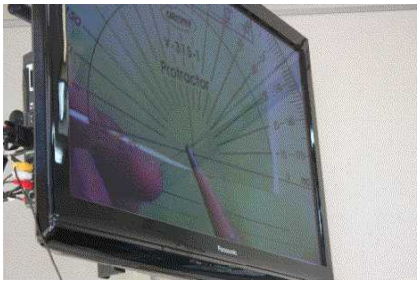
研究主任が作成した大型テレビを使ったタイムカウンターのプログラムを活用して３分間計算ドリルをするという取り組みは昨年度から始まっている。

また、パワーポイントを使った漢字のフラッシュカード練習も３年担任が発案した。子どもたちが生き生きと活動する姿に触発され、その手法をまねてやってみる学級が広がるなど、自然と実践の共有化が図れていった。

(3)　視覚情報を加える

視覚情報も付け加えて指示・説明することで理解しやすく、また集中しやすくなる。授業の中で、できるだけ視覚的な支援を取り入れていこうということも確認して共通実践を進めた。

特に、今年度は「ＩＣＴを活用した授業改善事業」の指定を受けていることもあり、情報機器の活用も積極的に進めた



これは、4 年生の算数科で角度の学習をしている場面である。実物投影機と大型テレビで分度器の操作を提示している。自分たちと同じ分度器なので操作の説明がよく分かり、子どもたちも画面に集中している。

電子黒板も情報提示ツールとしては優れた機能をもっているので社会科や外国

語活動では積極的に活用されている。

集会、全校練習等、多人数対象の活動の場でも視覚支援を意識して進めている。

これは、ショート集会の一コマである。指人形を使って子どもたちの視線を集めたり、プログラムを発表が終わるたびに外していき、今、どこまで会が進んでいるのかが見えるように工夫している。

(4) 教師の言葉を改善する

桂田先生が指摘されているように、子どもたちの学習に向かう意欲や集中力は、教師の指示や説明、対応における「言葉」の質によって大きく左右される。

どの子にもここちよく届く声のトーン、理解しやすい端的な説明、集中を生み出す間や抑揚、そういったものをみんなで学び合うために、今年度の校内研では授業ビデオを活用した事後検討会を研究主任が中心になって積極的に進めてきた。教師、子ども、全体の三方向から撮ったものを一本のビデオに編集し、教室を立体的に把握できるようにした。それを見ることで、教師の指示に子どもがどう反応し、動いたかが明瞭に見えるようになった。何より、授業者が自分自身の言葉や対応を客観視することで課題もはっきり見え、授業改善の方策も自覚できるようになった。

本校の校内研では、１学期と２学期の２回、全学級が公開授業を行う。その中でベテラン教師のすぐれた指導を若い教師が見て学ぶ機会が数多くある。そうした取り組みの中で若い教師の変容は著しいものがあった。

２年の担任は初任者で、１学期は授業に集中できない子どもたちの対応に苦慮していた。しかし、話し方や指示のしかたを改善し、授業が分かりやすく展開されるようになるにつれ、学習に集中して取り組む姿が増え、１１月の研究授業ではどの子もが生き生きと学習に参加する姿が見られるようになった。2 学期末懇談会では保護者からも「学級がずいぶん落ち

着きましたね。」とうれしい評価をいただけるまでになった。

３. 集団指導の中での個別支援

～全体指導の中で、個別支援の必要な児童への対応はどのようにすればよいか～

集団への指導のあり方を工夫することで個別的な支援はかなり軽減されるが、それでも支援を必要とする児童への個別対応は欠くことができない。

市特別支援員による複数指導体制できめ細かな支援を図る一方、担任が、全体指導をしながら個別的な関わりの時間を生み出す工夫も様々になされていった。

(1)　１時間の中に習熟度別指導を組み込む

桂田先生の言われる「１時間の中に習熟度別指導を組み込む」ということは、授業の中での個別支援を考える上で重要な視点である。

その実践事例として、４年の算数科の授業を紹介したい。

―前半、全体学習で分度器の使い方を学んだ後、

「じゃ、練習問題をやってみましょうか。速くできた人はどんどんやってください。

アイウエ　カキクケと用意しました。アの答えはイにのっています。それで答え合わせして。」

と練習用小プリントを用意して各自で取り組ませた。その間にまだ分度器の使い方がよく分からない子どものところに行き、個別指導を行った。―

３年生の「生き物博物館をつくろう」という総合的な学習の授業でもこんな場面があつた。

―生き物にインタビューする形で自分の疑問を追求させるという指導プランで、前半、ホウセンカを題材にしてやり方を教えた後、「じゃ、今日はみんながつかまえてきたバッタを主人公にしてインタビューしてみよう」とワークシートを配布した。そのとき、

「することが分からない人は前に来ましょう。」という指示を付け加えた。すると４人の子が教師のところへ来た。それぞれ、あいまいだったところを教師から説明してもらうと、納得した表情で自分の席にもどり、ワークシートに取り組んでいった。―

こうしたちょっとした工夫で全体指導の中で個別支援の時間を生み出すことができた。

(2) 学習形態の工夫　～個人学習･班学習～

６年を担任する教諭は、「個人学習タイム」を組み込んだ国語科や社会科の授業に精力的に取り組んでいる。

全体に課題を投げかけ、その後、一人ひとりが課題と向き合い考えを深めていく時間を設定する。担任は子どもの間を回りながら個別指導を行う。そして、再び全体での話し合いに戻していく。

この「個人学習タイム」に加えて、「班学習タイム」を取り入れる試みも全校的に広がっている。班で考え合うことで、子どもどうしの教え合い、学び合いが生まれ、学習につまずいている子へのフォローができる。

こうした学習スタイルは低学年ではまだ難しいが、中学年ぐらいから取り組んでいけるのではないだろうか。

Ⅵ　研究のまとめと今後の課題

ユニバーサル教育の理念を共有し、組織的な授業改善を図る中で、「玉小のユニバーサル教育スタンダード」と言えるような、どの学級でも必ず行っている指導・支援の手法がいくつも生まれた。組織的な実践は着実に子どもの変容を生み出す。１学期は集団学習がなかなか成立しづらい悩みを抱えていた学級が確実に落ち着く方向に向かっている。集団で集まったときのざわつきも、短時間でおさまるようになった。

これは、全校で演劇を鑑賞している場面である。最初から最後までざわつき一つ無く、非常に集中して見ていた。後で劇団の方から「こんなに集中して見てくれて、自分たちもうれしかった」と言っていただいた。

こうした日常の姿の変容こそ、我々が求めているものであり、ここ数年間の取り組みの確かな成果を実感する。

我々の取り組みを根底で支えているのは「教師間の開かれた学び合い」にある。日々の教室を開き、ありのままの姿を見合いながら、学年、学年部、そして全校で次の取り組みの手立てを考えていく。そうした教師間の連帯が本校のユニバーサル教育の実践を前進させてきた。今後も、そういう組織であり続けることを願う。